

日本民族紹介と日英翻訳機械

JジOMョウONモンあかでみい 山田 学 ©

www.jomaca.join-us.jp

arigatou@image.ocn.ne.jp

序

日本の民族性を英語人に紹介する活動について全体的に検討し、その技術的最先端として日英翻訳機械の可能性について論じます。

一 言語過程説

日本語規範を実用の水準において確立・保持した日本民族を中心とする諸民族人を日本語人と言います。

英語規範を実用の水準において確立・保持したアングロ・サクソン民族を中心とする諸民族人を英語人と言います。

日本の民族性を英語人に紹介する活動は日本国民と日本国政府による日本国外政（軍事・外交・通商貿易）により統制・保護された日本語人の英語人に対する活動です。

なお、日本国外政における概念体系については以下が必要であると思われる。

USAの外交（軍事・外交・通商貿易）における英語規範の概念体系の水準へ日本国の外交（軍事・外交・通商貿易）における日本語規範の概念体系を接近させあるいは日本民族独自の概念体系を構築し逆にUSAの外交における英語規範の概念体系へ浸透させる。

さて、原言語から目的言語へ翻訳することは目的言語規範の概念体系へ原言語規範の概念体系を浸透させることです。

英語規範の概念体系へ日本語規範の概念体系を浸透させる日英翻訳を考えた場合、まず、日本語規範の概念体系の一部分において確立されている（言語過程説）という新しい言語学の概念体系を英語規範の概念体系へ浸透させる（言語過程説）英訳の仕事が大切であると思われる。日本の民族性を英語人に紹介する端緒として日本の新しい言語学を英語人に紹介する仕事です。この新しい言語学は日本民族の主体性と日本語規範の特殊性に配慮する中から構築されています。

言語は、対象を認識して表現してあるという、言語表現過程の結果である。対象を認識して表現してあるという、言語表現過程に着目することが大切である。概念を音声言語や文字言語につなぐ規範が言語規範である。なお音声言語は音楽的表現をとめない文字言語は絵画的表現をとまろう。

これが〈言語過程説〉です。

ここで音声言語や文字言語の語彙・句型・節型・文型・文章型をまとめて言語型式と呼ぶことにします。言語型式に着目し言語型式の構成による表現可能性を追究する言語学が〈言語構成説〉です。ただし音声言語や文字言語はあくまでも表現者の感覚・表象・概念という認識を言語規範を介して表現するものであり、表現者の感覚・表象・概念および言語規範に着目する〈言語過程説〉こそが認識と言語をめぐる諸問題を内容的に解決していきます。〈言語構成説〉は形式にとられすぎ内容的な解決が困難なのです。

ソシユール派↓チョムスキー派↓認知言語学派という流れを〈言語過程説〉の立場から観察すると〈言語構成説〉から〈言語過程説〉への接近過程、形式から内容への接近過程であると判断できます。

〈言語過程説〉の学者は時枝誠記(1900～1967)・三浦つとむ(1911～1989)・宮下眞二(1947～1982)らであり、時枝誠記がソシユール言語学に大きな不足を感じ、かえって日本の国学の本居宣長門下の鈴木 胤あきつらから本質的なヒントを得たことを端緒とします。

日本語規範は助詞・助動詞などの主体的表現がそのまま単語として表現される傾向にあります。英語規範において主体的表現は語順や単語の形態変化などにより表現される傾向にあります。前者の主体的単語という日本語規範の特殊性から、鈴木 胤や時枝誠記は以下の真理に到達しました。到達しやすかったのです。

言語はまず主体的表現(辞)と客体的表現(詞)とに分類されることが本質的である。

このようにして欧米の言語学に対する本質的な批判がまず日本語人の一部の者により開始されています。主体的表現(辞)への着目から、対象を認識して表現してあるという、言語表現過程への着目に進みました。

〈言語過程説〉英訳はもちろん時枝誠記・三浦つとむ・宮下眞二らの著作集をそのまま英訳することも大切ですが、英語規範の概念体系に浸透しやすい〈言語過程説〉教科書をあらためて日本語にて書く試みも大切です。この教科書を英訳することにより後述する日英翻訳機械において〈日英意味分類記号〉がよ

り本質的となります。

〈言語過程説〉のうち三浦つとむ言語学はマルクス、エンゲルスを継承・発達させた矛盾論理学（いわゆる唯物弁証法）を認識論や言語学に適用しつつ時枝誠記言語学を批判的に継承したものです。三浦つとむの文体は民衆にわかりやすい日本語ですが、著作内容そのものは高度な学問であり、容易に理解できると思うと理解を誤ります。三浦つとむの文体はドイツの学者に学んだ矛盾論理学の日本語表現であり、ドイツ語化された実用の日本語です。

英語規範の概念体系は、イギリス人の実証主義やアメリカ人のプラグマティズムと深い関係にあります。また、英語は資本主義・民主主義時代の国際語の代表として、拙速な意思伝達のために多く使われていますが、本質的なことを深く考え抜く学問の概念を、表現しにくい傾向にあるかもしれませんが。

三浦つとむ言語学英訳を考える場合、ドイツ語化された日本語の概念体系を英語規範の概念体系に浸透させ、論理学と言語学の本質的な概念を英語規範の概念体系に浸透させる試みとなります。

三浦つとむは家庭の事情により学校歴は実業学校中退ですが、日本の一民衆としての独学のたいへんな苦勞により、その学問歴は日本民族が世界に誇るべき高水準にあると、わたくしたちは評価しています。

日本語の語・句・節・文・文章として表現される日本語の概念の分類体系を把握すること。これを日本語概念論と言います。日本語概念論の構築はグーグル・アマゾン・アップル・アドビなどの各社が推進している Web2.0 の潮流において、日本語検索エンジンの改良に貢献します。

英語の語・句・節・文・文章として表現される英語の概念の分類体系を把握すること。これを英語概念論と言います。

宮下眞二は時枝誠記・三浦つとむに学びつつ日本語人かつ英語人として英語概念論の構築に果敢に挑みましたが、生活において精神の安定を保てず若くして亡くなりました。わたくしたちの日英翻訳は彼の遺志を継ぐものであります。わたくし個人は宮下眞二『英語文法批判言語過程説による新英文法体系』により高校英文法優等生の知識を根底から破壊され、また、具体的な英語規範を必要とする仕事に就かなかつたから、英語概念論の本質的な部分は追究してきたものの、具体的な英語規範習得を先送りにしたまま五十歳に至りました。五十の手習いとして具体的な英語規範習得がどこまで可能か、謙虚に試行いたします。もちろん今後、〈言語過程説〉を深く理解し学問的な英語を上手に書ける翻訳者の協同をいただく必要があります。

わたくしは 1994 年に『学問の転換未来の世界を日本から』を著しました。わたくし個人の概念体系と日本語規範に関して拙著をご参照ください。

これからの人間社会を思考統合していく論理学の表現としては、絶対論理学

(いわゆる形式論理学・記号論理学)的な概念・判断・推論の英語表現・日本語表現のみでなく、矛盾論理学(いわゆる弁証法)的な概念・判断・推論の日本語表現・英語表現が大切です。

二 意味

言語の意味とは、その言語に関係づけられている、話したり書いたりした人による概念を中心とした認識です。

そして言語表現は、一定の表現状況のもとに、各単語規範の概念と語順規範の概念構造を表現し、また、非言語的表現(音声言語にともなう音楽的表現や文字言語にともなう記号表現・絵画的表現・改行段落表現)により、言語表現者が表現したい概念・表象・感覚を表現しています。

はじめに、表現したい感覚・表象・あいまい概念があり、次に、言語表現したい具体的な概念ないし概念構造を確立し、それに、言語規範の抽象的な概念ないし概念構造をあてはめて言語(語・句・節・文・文章)を確立し、さらに、非言語的表現(先述)を添えます。

言語は語↓句↓節↓文↓文章として構成され、それはすなわち、単語を並べることです。言語の概念は各単語の概念と語順の概念構造の統一です。言語規範は各単語規範と語順規範の統一です。

言語表現において、より具体的な概念や表象や感覚は、単語の累積と語順と非言語的表現と表現状況により、表現されます。

言語型式(語彙・句型・節型・文型・文章型)の分類を言語型式論と言います。わたくしたちは日本語型式論と英語型式論とに関心があります。そして日本語概念論と日本語型式論の区別と連関を追究し、英語概念論と英語型式論の区別と連関を追究します。

三 体内と世界

認識対象は体内と世界の統一です。

体内という対象は体内感覚を基礎として認識されます。

世界という対象は視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚を基礎として認識されます。

主体的概念は体内感覚を基礎とする体内認識を中心とした認識の概念化であり、主体的表現(日本語の辞)として表現されます。

客体的概念は視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚を基礎とする世界認識を中心とした認識の概念化であり、客体的表現(日本語の詞)として表現されます。

言語表現者は、生体自分(三浦つとむいわゆる現実的な自己)である場合と、脱生体自分(三浦つとむいわゆる観念的な自己)である場合とが、あります。

脱生体自分は、生体自分から離れ、(現実のあるいは架空の)世界の(時間と空間と微細性壮大性の)あらゆる部分へ移行します。

脱生体自分はそういう自分の想定(認識の反省)なのですが、生体自分による体内認識や世界認識をそれなりに保存して変化させます。

脱生体自分は、生体自分を客体とすることができます。

客体は実体と属性と関係の統一です。

日本語の主体的概念は言語規範として主体的表現(辞)を省略する無言語(いわゆる零記号)のことがあります。

認識対象(体内と世界)は個別性・特殊性・普遍性の統一であり、現象・構造・本質の統一です。

学問は主体的に道徳・経営・政治を進めるため客観的に物理・生理・認識の理を把握していきます。

わたくしたちは日本語人の世界観と英語人の世界観を対照していきます。日英世界観対照論です。

四 言語規範形成

人間伝統の生理的認識における感覚・表象・概念の記憶と音声言語・音声言語表象・文字言語・文字言語表象の累積、しだいに言語型式の自覚と言語規範の自覚。

個人の0歳から15歳までの生理的認識における感覚・表象・概念の記憶と音声言語・音声言語表象・文字言語・文字言語表象の累積、しだいに言語型式の自覚と言語規範の自覚。

個人の言語規範形成は人間伝統の言語規範形成をくりかえさせると良いのではないのでしょうか。

また、言語規範形成は、各言語人の道徳環境・社会環境・自然環境への生理的認識的な対応です。

五 世界観対照

日本語規範の時間・生活概念とそれを表現する日本語型式。英語規範の時間・生活概念とそれを表現する英語型式。英語の「時制」や「相」は〈言語過程説〉においても説明がまだ中途半端であると思われる。そして日本語の時間や動的属性の途上面・結果面についての概念と型式は英語と異質です。本稿においてこれらの問題は将来への課題とし、より本質的と思われることについて言及しておきます。

〈自分たちが生活させていたでいる自然や社会〉という、切実な現実的客体を意識している縄文思想や日本仏教などの精神が、日本語規範の概念構造

に反映されていると、わたくしは考えます。

一方、英語の「冠詞」の a (an) は〈ひとつのもの〉という意味です。the は〈そのひとつのもの〉という意味です。a (an), the は英語において究極の抽象名詞なのであり、究極の客体的単語です。a pen は〈ひとつのものの具体的にはペン〉という意味なのです。実は日本語人あまりない対象認識なのでまともに和訳すると句が長くなります。英語人の世界観は個人とか神とか〈ひとつのもの〉〈そのひとつのもの〉に注目します。そしてかぞえる実体かかぞえない実体かについて区別します。日本語において助詞という主体的単語を上手に表現できないと上手な日本語にならないよう英語において「冠詞」という客体的単語を上手に表現できないと上手な英語にならないようです。

英語においては種類が少い音韻も短い「人称代名詞」(I, we, you, he, she, they とその形態変化)をくりかえし反復して表現します。〈わたし(たち)〉と〈あなた(たち)〉と〈彼・彼女(たち)〉という対話関係をつねに意識する概念構造であり言語型式です。「人称代名詞」というより〈対話詞〉と呼びたいです。〈対話〉の中心として「はつねに大文字表現します。一方、後述する日本民族の和(談合)は〈わたしたち〉と〈よその人たち〉という集団の離合集散をつねに意識しています。日本語においては「人称代名詞」をあまり表現しません。その種類は多く音韻も長いです。人間関係を具体的にことさらに意識するときに表現するからです。英語の〈対話詞〉よりぼやけたいわば〈人間関係詞〉です。わたくし・ぼく・自分・おれ・わたしたち・わたしども・ぼくたち・われら、あなたさま・お宅さま・あなた・きみ・あんた・おまえ・貴様・きみたち・おまえら・あんたら、こちらさま・こちらさん・そちらさま・そちらさん・あちらさま・あちらさん・氏・彼・彼女・あの人たち。

さて、イタリア・ルネッサンスのレオナルド・ダ・ヴィンチ(1452～1519) ↓ドイツ宗教改革のルター(1483～1546) ↓イギリス文学のシェイクスピア(1564～1616)という時代の流れにあり、英語の SVO (主語・述語動詞類・目的語)という語順がほとんど固定的に確立されたのは16世紀でした。SVO という英語型式が近代の国際的な言論活動を統制・保護したと言っても過言ではありません。一方、日本語型式は SVO (主語・述語動詞類・目的語)とはまったく異質であり、これからの世界史において日本語の型式と概念の長所短所を把握していくことはとても大切な仕事です。

It is fine today. (本日は晴天なり。) この it も抽象名詞であり、〈世界〉という意味です。

以上、このあたりは宮下真二『英語文法批判言語過程説による新英文法体系』とともに黒川泰男『英文法の基礎研究日・英語の比較的考察を中心に』に学びつつ、日英世界観対照論をわたくしなりに記し始めています。英語教育・英語学

専攻の黒川泰男氏は〈言語過程説〉の学者ではありませんが、経験的に優れた指摘をしています。

なお、文における主部と述部は文章における主題と説明の構造が単文において存在している特殊な形態です。文として普遍的な形態ではありません。節や文として普遍的なことは客体的表現と主体的表現の統一です。

英語の *come* について言及しておきます。英語の *come* は日本語の〈来る〉という意味とはずれがあり、先述した〈対話詞〉の対話関係を意識した意味をもつようです。*come* は「I, we と you の対話において親しみがます方向に動く」という意味をもつようです。念のために井上永幸・赤野一郎編『ウイズダム英和辞典 第2版』p351〜2から英語例・和訳例・解説を引用しておきます。

Are you going to come to the party?パーティには行くつもりですか。(come は話し手が自分も行くつもりであることを暗示する。go ではそのような暗示を伴わない。)

I've come about the room.部屋のことで(話があつて)やってきました。

You are free to come and go as you please.お好きなように自由に行き来なさってください。(連続的な「行き来」の動作をいう場合 go and come の語順はまれ。)

We're coming to you live from Los Angeles.ロサンゼルスから生中継でお送りしています。

I'll come get you when it's time.時間になったら迎えに行くよ。

- ①象は鼻が長い。Elephants have long trunks.
- ②静香はスケートが得意だ。Shizuka is good at skating.

①②の日本語とも主部と述部がある文であり、①主部「象は」述部「鼻が長い」②主部「静香は」述部「スケートが得意だ」です。

しかし、日本語においては主部と述部(主題と説明)という意識より、①「くはくがく■」②「くはくがくだ」という3つの主体的概念の累積があります。

(■は断定という主体的概念はあるが表現を省略する無言語であることを示す。)

①の「は」は「象」における普遍性に着目する主体的概念の表現です。②の「は」は人々全体における「静香」の特殊性に着目する主体的概念の表現です。

①の「が」は「鼻」という個別性に注目する主体的概念の表現です。②の「が」は「スケート」という個別性に注目する主体的概念の表現です。

①の「■」は「象」の普遍性として個別に「鼻」に注目し「長い」という属性を断定する主体的概念です。②の「だ」は「静香」の特殊性として個別に「スケート」に注目し「得意」という関係を断定する主体的概念の表現です。

英語には①②の日本語の「は」「が」のような主体的単語がありません。

まず① Elephants ■ (■は断定の無言語) ② Shizuka is とし、① ■ ② is という断定の主体的概念があります。文の始りのほうに断定の主体的概念があるから、主部と述部(主題と説明)を意識しやすいです。

次に①「は鼻が長い」という概念構造が英語規範にないから、^{持つ} have long trunks ^{長い鼻を} とします。②「はスケートが得意」という概念構造が英語規範にないから、^{上手} good ^{において} at skating とします。

日本語の「くはくが」という型式にどういいう英訳を対応させるかという法則性は具体的に分類していく必要があります。

次の日本語例にも言及しておきます。料理店で何を注文するかという表現状況があり、

ぼくはうなぎだ。 I'll have eel.

この日本語例は「ぼくの注文はうなぎ料理だ。」の省略文です。日本語人は一定の表現状況があるとわかる範囲で言語を省略し「くはくだ」のように主体的表現します。言語型式が英語のように固定的でないからです。(その表現状況から離れると誤解も生じやすいですが。) どういう英訳を対応させるかは同じような表現状況で英語人がどう表現するかを考慮します。

六 日本民族

日本民族の文化は主に以下の6文化の重層であると考えられます。

- ① シベリア大陸から移住した部族の文化
- ② 南方諸島から移住した部族の文化
- ③ 中国大陸から移住した部族の文化
- ④ 白村江敗戦を契機として中国から真剣に学んだ文化
- ⑤ 黒船来航を契機としてヨーロッパ(とくにドイツ)から真剣に学んだ文化
- ⑥ 太平洋戦争敗戦を契機としてアメリカから真剣に学んだ文化

そして井沢元彦氏は『井沢式「日本史入門」講座① 和とケガレの巻』において日本民族の根底にある宗教性はけがれとみそぎ、言霊、怨霊、和(談合)などであると指摘しています。

さて、今の日本社会はもともと西洋化した東洋であり、日本国はこれから諸民族調和への健康平和観光を演出するべきである、そのためには縄文文化や各地方の諸道諸芸や方言(とくにその音声言語)を再認識し未来志向において鍛

え直すべきである、それにより世界諸文化に翻弄されない文化体制を構築するべきである、とするのがわたくしの運営するJOMONあかみいの主張です。JOMONあかみいは学問的にも政治的にも（米日中各文化のバランス追求）を行っています。そういう立場から、英語的な日本語と縄文的な日本語と中国語的な日本語を創造していききたいです。

世界史水準においては異言語人との軍事・外交・通商貿易ないし論争・対話の経験が少い日本語人の認識において、まだ日本語表現していない日本民族の概念・表象・感覚が多いです。英語規範の概念体系を意識しそれらをあらためてまず日本語表現していく試みが大切です。これにより日本語規範の概念体系が英語規範の概念体系に接近します。

また、文字言語にともなう絵画的表現や音声言語にともなう音楽的表現は翻訳不可能あるいは翻訳困難ですから解説および日本語規範習得への案内も必要です。

井沢元彦氏が指摘する言霊は、認識における念と音声言語にともなう音楽的表現ないし呼吸を大切にする文化です。これこそは翻訳不可能あるいは翻訳困難であり、解説的な紹介ないし日本民族的な生活体験も必要です。和（談合）は言語の表現状況に配慮する文化です。茶室文化と言えるかもしれません。

日英翻訳以前に日本国民の健康平和な自立と地方の健康平和な自立と日本国の健康平和な自立が大切です。

七 概念対照

今後、世界史観点の日本民族紹介という発想において、日英翻訳の目的に関し、プロ・アマの日英翻訳者や日英翻訳機械設計者（特殊な日英翻訳者）の翻訳観ないし機械翻訳観を無理なく無駄なく社会的に統一していく人格交流ないし研究組織が大切であると、わたくしは考えます。この人格交流ないし研究組織において、日本神道↓日本仏教といった日本語人の宗教性とユダヤ教↓キリスト教↓プロテスタンティズムといった英語人の宗教性を対照しつつ、日本語規範の概念体系と英語規範の概念体系を対照していく。こういう日英概念対照論が大切である、思われます。そして日本語の健康平和な英語化と英語の健康平和な日本語化、すなわち英語規範と日本語規範の健康平和な相互浸透が、健康平和な日米外交同盟にも貢献します。

八 日英翻訳機械

翻訳者は原言語の表現者の認識に同化し、同化した認識を目的言語規範の概念体系において概念化し目的言語表現します。その際、文字言語にともなう記号表現・絵画的表現・改行段落表現や音声言語にともなう音楽的表現にも配慮

します。表現者の認識に同化する際、表現状況を考慮し、目的言語表現する際、翻訳目的を考慮します。

日英翻訳機械設計者（特殊な日英翻訳者）は翻訳機械に入れられるであろう日本語の表現者の認識に一括同化し、一括同化した認識を英語規範の概念体系において概念化し自動英語表現するようしくみます。その際、文字言語にもなう記号表現・絵画的表現・改行段落表現や音声言語にもなう音楽的表現にも配慮します。日本語の表現状況記号を考慮し、英語への翻訳目的記号を考慮します。

翻訳機械設計においてはコトワザなど言語の慣用例を集積・分類する言語慣用語論が実用的です。慣用例たる句例・節例・文例・文章例は句・節・文・文章全体を翻訳単位としそれらの部分を考慮する必要がないからです。

さらに日英翻訳機械への慣用例の実装はプロ・アマの日英翻訳者用の日英翻訳機械から、たとえば英語人圏への素人旅でまにあえばよい水準の、英語規範はもとより日本語規範の習得も高度ではないかもしれない日本語人のための日英翻訳機械まで、想定利用者を考慮することが実用的です。

慣用例の分類は、日本語人として、日本国民として、各職場として、各生活地域として、個人として、あるいは外政・統治担当者として、行政・国民経済担当者としてという視点が大切であると思われれます。

日英翻訳機械設計者は、〈翻訳機械に入れられるであろう日本語の表現者の認識に一括同化し、一括同化した認識を英語規範の概念体系において概念化し〉という仕事を〈日英意味分類記号〉の構築に結晶させます。〈日英意味分類記号〉（記号と英語による表現）は日本語意味の英語人による認知です。日本民族の国際化に貢献します。

〈日英意味分類記号〉の構築は日本語概念論・日本語慣用語論・日本語型式論・英語概念論・英語慣用語論・英語型式論・日英世界観対照論・日英概念対照論・日英翻訳論・日英機械翻訳論を考慮し最高品質最低費用をめざしたいです。

また、〈日英意味分類記号〉は六角形・五角形・黄金比を組み込んだ立体グラフ内の位置記号にすることが良いのではないかと予想されます。そして表現状況記号や翻訳目的記号は利用者のためにイラスト的なアイコンという表意記号を用意することが良いのではないかと思えます。

九 「自然言語処理」との対話

長尾 眞監修『ヒューマン・インフォマティクス触れる・伝える・究めるデジタル生活情報術』において独立行政法人科学技術振興機構が推進する「戦略的創造研究推進事業（CREST）」の「高度メディア社会の生活情報技術」プロジェクトが紹介されています。その3-3「思考や文章の本質に迫る」において鳥

取大学工学部教授・池原 悟氏らのプロジェクトが紹介されています。

池原氏らは1980年にNITの研究所において「自然言語処理」の研究を開始し1983年に〈言語過程説〉の存在を知り1996年に「言語・認識・表現」研究会 (The Study Group of Language, Cognition, and Expression' 略称 LACE 研究会) を発足させ2001年12月より上記CREST事業に参加しています。

池原氏らは「自然言語処理」手法を継承しかつ画期的な批判を行い、日英翻訳現象についてコンピュータ最前線を駆使し優れた解析を行っています。

2002年発行の横須賀壽子編『胸中にあり火の柱三浦つとむの遺したもの』に「三浦つとむ・世界平和・一学徒」という短文を載せていただいたわたくしは横須賀氏の呼びかけにより2002年からLACE研究会に参加し、三浦つとむ学徒の立場から対話させていただきました。本稿拙文はその成果であり、池原氏らのプロジェクトに接続させていただきます。

とにかくも、人間の感覚からコンピュータの01記号まで、人間(感覚・表象・概念・言語規範・言語・記号)からコンピュータ(用途別操作手順集)〈操作手順用記号体系〉〈機械制御記号集〉(01記号)まで、良縁を構築したいものです。なお、〈用途別操作手順集〉はいわゆるアプリケーション・ソフト、〈操作手順用記号体系〉はいわゆる「プログラミング言語」、〈機械制御記号集〉はいわゆるOSです。人間がある程度コンピュータ化したら、今度はコンピュータを人間化する番です。人間(認識・表現)とコンピュータ(通信・記録)の相互浸透です。

文字言語や音声言語をコンピュータに記録する際、語・句・節・文・文章の模範という言語模範を集積していきたいです。日本語模範を集積し、英語模範を集積し、日英対訳模範を集積していきたいです。それが人間(認識・表現)への良い教育となります。

なお、異言語人が日本語を学ぶための日英対訳集積の著書としては、今井幹夫『イラストと例文でわかるにほんごことばじてん』があります。今井幹夫は〈言語過程説〉に深く学ぶ日本語教育研究者です。

日本語概念論も日本語型式論も英語概念論も英語型式論も日英翻訳機械が理想的に要請する水準から観ればまだまだ発達不足です。そのことは〈言語過程説〉の今までの学者においても例外ではありません。今までの認識論や言語学の学者は、機械に実装すれば明確に結果が出る工学の厳しい現実論の水準において、認識や言語の問題に取り組んでこなかったからです。

また、道徳・経営・政治・学問における演説・論文や文学における創作・鑑賞のための日本語概念論・日本語慣用語論・日本語型式論・英語概念論・英語慣用語論・英語型式論をもつともつと発達させていきたいものです。

十 さらなる前進

翻訳目的はまず、〈通過翻訳〉と〈理解翻訳〉とに二分類されます。〈通過翻訳〉は当面の異言語人との感情にも配慮し、原言語の概念構造をさておき、語・句・節・文・文章全体として目的言語人の概念体系が受容しやすい目的言語へ対応させる翻訳です。一方、〈理解翻訳〉は異言語人関係の将来にわたる理想を追求し原言語の概念構造に忠実に時には目的言語の型式を逸脱してまでも解説的にする翻訳です。たとえば英日翻訳において"See you again."を〈通過翻訳〉するなら「さようなら。」であり、〈理解翻訳〉としては「またお目にかかる日を。」と訳す文学者がいるかもしれません。

これからの日英翻訳においては、言語型式が固定的でない日本語の、とくに主体的表現(辞)の〈理解翻訳〉も大切にしたいです。

素朴な日本民族・日本語人として主体的概念・表象・感覚を大切に、日本語の語順・型式・慣用・概念と、国際語として軍事・外交・通商貿易・論争・対話のために鍛えられた、英語の語順・型式・慣用・概念。

わたくしたちは日本語の概念(各単語の概念と語順の概念構造の統一)と英語の概念(各単語の概念と語順の概念構造の統一)の区別と連関を追究していきます。

日本語の概念と英語の概念は同質ではなく異質であるとまず自覚した上において、〈通過翻訳〉または〈理解翻訳〉として、日英の語順・型式・慣用を対応させるべきです。

日英翻訳機械においては入れられるであろう日本語に対応して自動英語表現するため次のようにしくみます。

機械においてあらかじめ準備・実装するものは日英対訳集積(知識データベース)です。この日英対訳集積を日英翻訳論としていかに論理的にし表現状況・翻訳目的を考慮していかに実用的にし実装情報をいかに「軽く」し動作を速くするかが問題です。たとえば特殊な情報はインターネットやDVDにおいて計画的に分散記録する方法もあるでしょう。

開発手法としては、日英対訳コーパス(大規模データベース)の統計的解析から日英翻訳現象における法則性を発見しつつ、一方、論理学・認識論・言語学をさらに発達させてそれらの法則性を本質的に解明していく。こういう現象解析と本質解明の調和によりしだいに日英翻訳構造を把握し試作機械に実装していきます。

先述したように、日英翻訳機械設計者はまず、翻訳機械に入れられるであろう日本語の表現者の認識を一括同化します。そして一括同化した認識を英語規範の概念体系も意識しつつ、

日本語慣用例（句例・節例・文例・文章例）と日本語型式（語彙・句型・節型・文型・文章型）を日英翻訳論において論理的に分類した（日本語例・型体系）

として表現し記録します。〈日本語例・型体系〉に核心として付与する（日英意味分類記号）（記号と英語による表現／池原 悟氏いわゆる「真理項」）を構築していきます。

〈日英意味分類記号〉に〈英訳例・型集〉（英訳慣用例と英訳型式の集積）を対応させて記録します。英訳慣用例と英訳型式は〈通過翻訳〉と〈理解翻訳〉を基礎とする翻訳目的別に複数個を用意します。日本語の概念が英語の概念にないか、少し似た概念しかない場合、英訳の中に日本語のまま表現したり、英語の比喩を考案したり、英語の註をつけたりします。

以上のように論理的な実用的な日英対訳集積を準備・実装します。日本語にともなう非言語的表現（文字言語にともなう記号表現・絵画的表現・改行段落表現や音声言語にともなう音楽的表現）を英訳にともなう非言語的表現または英語解説としてどこまでどう反映させるか設計し実装します。

日英翻訳機械に日本語が入れられると〈日本語例・型体系〉のうちのどの部分かが自動照合されます。日本語文章の部分から全体へ日本語処理の累積により〈日英意味分類記号〉が特定されていきます。いわゆる「文脈から判断する」ということの機械化です。また日本語の表現状況記号や日本語にともなう非言語的表現の情報が入れられることによっても〈日英意味分類記号〉が特定されていきます。

〈日英意味分類記号〉が特定されるとそれに対応させてある〈英訳例・型集〉の中から英訳文章が自動合成されていき日英翻訳機械から出てきます。その際、英語への翻訳目的記号が入れられることにより英訳（および英語の註・解説）が決定されていきます。

〈日英意味分類記号〉が特定されないという想定外の事態にどう自動対応するか設計し実装しておきます。

日英機械翻訳論の核心について触れておきます。

日英翻訳機械に入れられるであろう日本語の〈語と語順〉は日本語的な（認識対象（現実のあるいは架空の・体内と世界）と認識の反省）の反映です。

そして語順に関しては、語順を変えると意味をなさない語のまとまりと、意味は変るが変えられる語ないし語のまとまりの順序とが、あります。また、日本語の句例・句型・節例・節型・文例・文型・文章例・文章型に相当する語のまとまりにおいて、部分に分けずにその全体に英訳を対応させることが良い、語のまとまりがあります。単語に英訳を対応させることが良い単語と、こうい

う語のまとまりとをあわせて、日本語の翻訳単位と呼ぶことにします。日英機械翻訳における翻訳単位の発見が池原氏らの優れた研究の特長です。

日本語の句型のどの部分にどの範囲の語を代入できるか。節型のどの部分にどの範囲の語・句を代入できるか。文型のどの部分にどの範囲の語・句・節を代入できるか。文章型のどの部分にどの範囲の語・句・節・文・文章を代入できるか。

池原氏はこのように代入できる語・句・節・文・文章を工学的に「線形要素」と呼んでいます。代入を受ける（または受けない）側の表現型式・表現例としては、そのどの部分も代入を受ける句型・節型・文型・文章型を「線形表現」と呼んでいます。（すなわちすべての部分の英訳の重ねあわせが全体の英訳であるという場合。）他方、その一定の部分が入入を受けない句型・節型・文型・文章型とその全体が入入を受けない語彙・句例・節例・文例・文章例を「非線形表現」と呼んでいます。「非線形表現」の代入を受けない部分を「非線形要素」と呼んでいます。（すなわちすべての部分の英訳の重ねあわせが全体の英訳ではなく、まず全体的な英訳があり次に代入部分の英訳を埋めるという場合。）

翻訳機械の歴史において「非線形表現」である表現型式・表現例の存在を軽視する（コンピュータ自身の論理にとらわれた）記号論理的な「線形」発想が、壮大な徒労を生んできました。原言語と目的言語が同族言語の場合、考慮すべき「非線形表現」は少いですが、日英翻訳のようにもつとも異なる言語間において、しかもより素朴な日本語から国民国家思想的な英語への翻訳の場合には、考慮すべき「非線形表現」が多いです。

それでも、日本語概念論・日本語慣用語論・日本語型式論・英語概念論・英語慣用語論・英語型式論・日英世界観対照論・日英概念対照論をさらに発達させて、考慮すべき「非線形表現」と「非線形要素」を現実的かつ少数精鋭にしていくことが工学的に有利なのです。

こうして日英翻訳機械に入れられた日本語の（日本語例・型体系）に対する自動照合は、同じ語彙・句例・節例・文例・文章例の発見や、同じ句型の発見と語の代入、同じ節型の発見と語・句の代入、同じ文型の発見と語・句・節の代入、同じ文章型の発見と語・句・節・文・文章の代入により、なされます。

おわりに

一見、書齋にこもった学者の学問のための学問のような（言語過程説）の研究ですが、実は日本民族としての健康平和運動のため、諸民族調和の核心を推進する根本研究なのであり、そういう深い大志を三浦つとむらの人生から学びたいものです。

今の日本社会には、英語の教育とコンピュータの教育に関し、一種のあせりもあるようですが、あえて日本の国学をルーツとする〈言語過程説〉の立場から、日本語・英語・コンピュータに関する新しい生産の企画について論じました。

遠い将来をにらむわたくしどもの根本研究の壮大な有益さを日本社会に理解していただき信用していただき研究体制・研究資金・後継者育成条件を確保していくことも大切なことです。

以上、三浦つとむ学徒の立場から問題点の整理を試みました。わたくし個人としては、〈言語過程説〉を深く理解する翻訳者の協同もいただき、まず、本稿拙文の英訳から検討したいと考えています。

言及した著書の出版社・発行年などを記します。

- p3,6 宮下眞二『英語文法批判言語過程説による新英文法体系』（日本翻訳家養成センター・翻訳の世界選書 1982年）
- p3 山田 学『学問の転換未来の世界を日本から』（民衆図書刊行会 1994年）∥自費出版 www.jomaca.join-us.jp 参照
- p6 黒川泰男『英文法の基礎研究日・英語の比較的考察を中心に』（三友社出版 2004年）
- p7 井上永幸・赤野一郎編『ウイズダム英和辞典 第2版』（三省堂 2007年）
- p8 井沢元彦『井沢式「日本史入門」講座① 和とケガレの巻』（徳間書店 2006年）
- p10 長尾 眞監修『ヒューマン・インフォマテイクス触れる・伝える・究める デジタル生活情報術』（工作舎 2005年）
- p11 横須賀壽子編『胸中にあり火の柱三浦つとむの遺したもの』（明石書店 2002年）
- p11 今井幹夫『イラストと例文でわかるにほんごことばじてん』（国書刊行会 1999年）